

接尾辞「-化」, -ize, -ify の属性叙述機能

影 山 太 郎

1. 事象叙述と属性叙述

言語の本質的な機能は情報の伝達であるが、この伝達機能には2つの種類が認められる。ひとつは、現実あるいは架空の世界において特定の時間と空間で展開する出来事ないし状態を表現することである。

- (1) a. 松坂選手は(今だけ)左手に結婚指輪をしている。
 b. ハワイの人はふだん、裸足ですか?
 c. しばらくの間、廊下に立っていなさい。

平叙文(1a)、疑問文(1b)、命令文(1c)といった構文の違いはあっても、これらの文はいずれも、何らかの出来事や行為が特定の時間に起こることを述べている。このような時間の流れに沿った出来事や状態の描写は、事象叙述(益岡 2004)、局面レベル叙述(stage-level predication: Carlson 1980)、あるいは出来事叙述(event predication: Krifka et al. 1995)と呼ばれる。

これに対して、(2)のような文は時間の流れを超越した固定的な状態を表す。

- (2) a. 松坂選手は(*今だけ)太い腕をしている。
 b. ハワイの人は(*ふだん)長身ですか?
 c. ゾウは(*しばらくの間)鼻が長い。

このような文は、主語ないし主題となる名詞の恒常的な性質を表す状態文であり、「いつからいつまで」や「今だけ」といった時間的な限定を加えることができない。そのため、これらは属性叙述(益岡 2004)、個体レベル叙述

(individual-level predication: Carlson 1980),あるいは特徴付け叙述(characterizing predication: Krifka et al. 1995)などと呼ばれる。

(2b)のような「XはYだ」型の構文は日本語文法で名詞文またはコピュラ文と呼ばれるが、名詞文が常に属性叙述を表すわけではないことに注意しておきたい。(3)は名詞文であるが、特定の時間を限定することができる。

(3) 兄は(2001年から2006年まで)弁護士/大学院生だった。

(2)の「長身」や「太い腕をしている」は「*長身をやめる/*太い腕をやるのをやめる」と言えないのに対し、「弁護士/大学院生」の場合は「～をやめる」と言うことができ、また、いつからいつまでという時間限定も可能である。従って、(3)は属性叙述ではなく、「弁護士活動をする/大学院で研究する」という意味を表す事象叙述と見なされる。

上で述べた2つの叙述機能の違いは、従来の研究では、主語になる名詞句の総称性や、個体レベル述語(たとえば *intelligent* や *tall*)と局面レベル述語(*sick* や *available* など)の対比として論じられる程度であり、体系的な研究は少ない。また、これまで研究されてきたどの言語においても、事象叙述と属性叙述を識別するための専用の形態がほとんどないため、両者の違いは単に観念的あるいは語用論的な違いに過ぎないとされることもある。

事象叙述と属性叙述の違いが明確な形として現れる例として知られているのは、スペイン語の *be* 動詞に当たる *ser* と *estar* である。*ser* は主語の本質的(essential)な性質を述べる補部を取り、*estar* は主語の偶発的(accidental)な性質を述べる補部を取ると、古くから言われている。(4)と(5)の例は Arche (2006)からの引用。

(4) *ser* (例文の *es* は三人称単数現在形)

a. *Jelena es/*está alemana.*

*Jelena ser/*estar German* 'Jelena is German.'

b. *Juan es/*está muy ignorante.*

*Juan ser/*estar very ignorant* 'Juan is very ignorant.'

(5) *estar* (例文の *está* は三人称単数現在形)

a. *Juan está/*es contento.*

Juan estar/ser glad ‘Juan is glad.’

b. *Juan está/*es desnudo.*

*Juan estar/*ser naked* ‘Juan is naked.’

(4) は主語の本質的性質を述べる属性叙述に当たる。これらは、「*彼女は今だけドイツ人だ」とか「*ファンは今だけ無知だ」のように時間を限定することができない。他方、(5) は主語の偶発的、一時的な状態を述べるもので、「ファンは今だけ喜んでいる」や「ファンは今だけ裸だ」のように時間を区切ることができるから、事象叙述と見なすことができる。

補部となる形容詞によっては、本質的解釈にも偶発的解釈にも取れるものがあり、どちらの解釈になるかは *ser* か *estar* かの動詞の区別に反映される (Arche 2006)。

(6) a. *Pablo es/está guapo.*

Pablo ser/estar handsome ‘Pablo is/looks handsome.’

b. *Pablo es/está gracioso.*

Pablo ser/estar funny ‘Pablo is/is being funny.’

(6 a) で *ser* を使った場合は *Pablo* の本来の特徴として男前であることを意味し、*estar* の場合は、たとえばメーキャップをしていて今だけ男前に見えるという意味になる。(6 b) も同様で、*ser* の場合は *Pablo* が面白い男だという本来の性格を意味し、*estar* の場合は、ふだんはそうではないが今だけ滑稽な動作をしているという解釈になる。後者の場合、英語では進行形 (*Pablo is being funny.*) に当たるが、これは進行形そのものが「今だけの動作」を表すからである。しかしスペイン語では、進行形のような形を用いずに、*ser* と *estar* によって本質と偶発の違いが表出できる。(なお、*ser* と *estar* の区別は実際には更に複雑なようであり、種々の説がある。Arche (2006) を参照。)

筆者の知る限りでは、属性叙述 (個体レベル叙述) と事象叙述 (局面レベル叙述) の区別を語彙の違いとして明示するのはスペイン語の *ser/estar* だけで

ある。しかしながら、佐久間鼎（1941：153）は、この2種類の叙述タイプについて「言語の機能として考えても、ある本質的な相違が認められる」と述べている。もしそうだとすると、単に *ser/estar* だけでなく、他の言語にも2つの言語機能の違いを明示するような言語形式があるはずである。

これまでの筆者の研究では、次のように、もともとは事象叙述であったものが、属性を表すように変化する現象が幾つか発見されている。

(7) 英語の異常受身 (*peculiar passive*: Kageyama and Ura 2002)

- a. **This cup has been drunk out of.**
- b. **This hall has been signed peace treaties in before.**

(8) 日本語の異常受身 (Kageyama 2006)

この地方では毎朝、納豆が子供達に食べさせられている。

(9) 動作主の典型的動作を表す東欧諸語の再帰接辞 (Kageyama 2006)

リトアニア語 (Geniušienė 1987: 84)

Šu-o *kandžioja-si.*

dog-NOM bite-REFL 'The dog bites.'

(10) 動作主の典型的動作を表す英語構文 (影山 2003)

Humans destroy with guns and bombs, and nature with wind and rain.

(11) 場所の属性を表すロシア語やスペイン語の非人称再帰構文 (Kageyama 2006)

a. ロシア語 (Geniušienė 1987: 331)

Zdes' xoroo *spit-sja.*

here well sleeps-REFL

'One sleeps well here.'

b. スペイン語

Aquí se *duerme muy bien en verano.*

here REFL sleeps very well in summer

'Here one can sleep very well in summer.'

(12) 内項の属性を表す日本語の外項複合語 (影山 2006)

- a. [安藤忠雄氏 | 設計] のホテル
- b. その立候補者は [自民党 | 公認] です。

これらの一連の研究で、筆者は、もともとは具体的な時空間における出来事を表す事象叙述文が、出来事項 (**Event argument**) を抑制 (つまり不活性化) することによって、特定の時空間に言及することができなくなり、その結果として、総称的 (**generic**) な事態——すなわち、主語ないし主題となる名詞の恒常的な属性を叙述する機能——に変換されるという理論的な分析を示している (詳しくは **Kageyama (2006)** と影山 (2006) を参照)。

ここで問題になるのは、属性叙述はいつも事象叙述から派生的に生じるのかという点である。これまでの研究では、属性叙述だけに特化した言語形式は発見されていない。もちろん、**ser** と **estar** や、個体レベル述語と局面レベル述語の相違はしばしば論じられるが、それらは、もともとそのような性質を備えた散発的な語彙形式であり、生産的に派生されたものではない。本稿で問題にしたいのは、属性叙述に特化した言語形式で、しかも生産的に属性叙述を作り出すような形態が存在しないのかということである。もしそのような形態が発見されれば、属性叙述という言語機能が単に感覚的な意味解釈ではなく、「形」として確立されることになり、言語における事象叙述と属性叙述の区別がより明確になる。

以下では、「地球の温暖化」や「生活が欧米化する」のように名詞ないし形容的名詞について述語を作る「-化」という接尾辞に着目し、この接尾辞が、名詞に内在的な属性を生産的に作り出す機能を有することを述べる。これに関連して、英語の **civilize** などに見られる **-ize** と、**liquefy** などに見られる **-ify** という動詞派生接尾辞を比較し、これらの英語接尾辞は内在的な属性だけでなく、時間とともに推移する局面レベルの特性も表すことを指摘する。その結果、日本語の「-化」こそが、本稿で求める「属性叙述に特化した言語形式」に相当することが判明する。

2. 名詞の属性とクオリア構造

「-化」接尾辞の検討に入る前に、理論的分析の基礎となるクオリア構造（特質構造：Pustejovsky 1995, 影山 2005）に触れておかなければならない。クオリア構造を構成する4つの役割（クオリア）を簡単に説明すると次のようになる。

(13) クオリア構造（特質構造とも言う）

- a. 形式役割 (Formal Role) = その物の外的な性質
- b. 構成役割 (Constitutive Role) = その物の内的な構成, 内的な性質
- c. 目的役割 (Telic Role) = その物の本来的, 恒常的な機能や使用目的
- d. 主体役割 (Agentive Role) = その物の成り立ちや出処

たとえば、「ホテル」という名詞のクオリア構造は概略, (14) のように仮定できるだろう。

(14) ホテルのクオリア構造

- ・形式役割：個物, 人工物 (x)
- ・構成役割：客室, ロビー, フロント, レストラン, ……
- ・目的役割：客 (w) を x に宿泊させて, もてなす。
- ・主体役割：y が設計し, z が建築する。

↑
安藤忠雄氏が設計

すると、先に (12 a) で挙げた「安藤忠雄氏設計のホテル」という表現において、「安藤忠雄氏設計」という外項複合語は、それが修飾する名詞「ホテル」の主体役割の部分に「安藤氏が設計した」という意味情報を組み込むことによって属性の解釈が得られる。これは、益岡 (2004) の用語では「履歴所有の属性」に当たる。

同じように主体役割に意味情報を組み込むことで履歴所有の属性が発生する例として、他に (15) (16) のような表現を挙げることができる。

(15) 青森産のリンゴ, 産地直送の新鮮な野菜, フランス帰りの画家, 師匠

直伝の技, 中国伝来の護身術, 親譲りの無鉄砲

- (16) hard-boiled eggs (かたゆで卵), tailor-made products (注文仕立ての製品), custom-built computers, a retired teacher, an expired passport, a much-traveled man (旅行経験が多く知識の豊富な人), a well-read person (本をたくさん読んで博学な人), a widely published scholar (著作の多い学者)

益岡 (2004) は属性叙述を「履歴所有の属性」と「カテゴリー帰属の属性」に区別している。カテゴリー帰属の属性とは、「ゾウ (というものは、鼻が長い) のように、「ゾウ」というカテゴリーが本来的に備えている固有の属性ということである。しかしこれまでの研究では、カテゴリー帰属の属性 (以下では、内在的属性と呼んでおく) というのは名詞に固有の性質であるというだけで、それ以上のことは、ほとんど明らかになっていない。以下では、内在的属性とはどのようなものかという本質的な問題を、「-化」という接尾辞を通して見ていくことにする。とりわけ、この接尾辞は、クオリア構造の中でも「モノの固有の性質」を表すと考えられる形式役割と構成役割に直接的に言及する形態であることを指摘する。

3. 「-化」による内在的属性の創出

接尾辞「-化」の意味用法に深く入る前に、まず、この接尾辞に関するこれまでの研究を簡単に見ておこう。

野村 (1978) の研究は、純粋に形態論的なもので、「-化」が付く語基の品詞を主として調べ、この接尾辞が体言と相言につくが、用言にはつきにくいことを指摘している。しかし品詞制限を述べているだけで、体言、相言と言っても具体的にどのような意味的特性を持つ単語に付くのか、あるいは、用言でも「安定する」と「安定化する」のように両方が可能な場合、どのような意味の違いがあるのかといった考察はない。

田窪 (1986) は、野村の形態論的研究を意味用法に広げ、「-化」の意味と

して「ある性状・状態にすること／なること」と規定している。また、「最近の男性は女性化している」のように、主語となるモノの実体概念ではなく、それが持つ性状や性質を表す——つまり、「女性」そのものになるのではなく、「女性的」になる——ことを意味する場合があることを指摘している。しかしながら、どのような場合に実体概念が変化し（たとえば「アルコールが気化する」）、どのような場合に性質だけが変化するのかという点は考察されていない。また、「-化」の意味を「ある性状・状態にすること／なること」と捉えるのは一般的すぎて、たとえば、「この4月に息子が大学生になった」という事態を表すのに、なぜ「*息子が大学生化した」と言えないのかといった疑問に答えることができない。

田窪論文の主眼は、むしろ「-化」の自他交替にある。たとえば「老化する」は自然にそのような状態に変わるから、自動詞的に使われるのが普通であり、他方、「シナリオ化」という行為は人為的で動作主を必要とするから、他動詞として使われるのが基本であるといったことを指摘している。

前二者の研究を承けて、小林（2004）は自他交替の要因を更に検討し、加えて、「用言」のみと「用言+化」との意味の違い（たとえば「安定する」と「安定化する」の違い）を考察している。

以上の3つが接尾辞「-化」に関する主な研究であるが、いずれも、「-化」が付く語基そのものの意味的な性質は全く論じていない。また、上で触れたように、なぜ、「アルコールが気化する」では実際にアルコールが気体に変化するのに、「男性が女性化する」では医学的な性転換ではなく、女性的になるという「典型的な性格」の変化を意味するのかといった、意味論からすると最も知りたいところが全く取り上げられていない。以下の考察では、こういった点をクオリア構造の観点から論じていく。

3.1. 「-化」は名詞の内在的屬性の変化を表す

最初に確認しておかなければならないのは、「X化」という表現そのものの叙述タイプである。(17)のような例を見ると、この表現は具体的な時間の流

れに沿った事象叙述を表すように思える。

- (17) a. ここ数年間で地球の温暖化が急速に進んでいる。
 b. アフリカ大陸は徐々に砂漠化してきた。
 c. 最近の大学教授はタレント化してきている。

これらは時間の進行と共に、対象となるモノの状態変化が進んでいることを表すから、一見したところ事象叙述のようである。しかし、そのように見えるのは、(17 a) では「進んでいる」という動詞が使われているためであり、(17 b, c) では「徐々に／最近」という副詞と「～してきた／～してきている」という助動詞があるためである。こういった述語自体が時間の流れを表すから、(17 a, b, c) の文全体も具体的に発生する出来事を意味することになる。しかしもしこれらの述語を除去して、(18) のように単純過去形にするか、あるいは結果状態を表すテイルを付けると、「X」という状態に変化し、その状態が固定していることが含意される。

- (18) a. 地球が温暖化した。
 b. アフリカ大陸が砂漠化した。
 c. その樹脂は、既にすっかり硬化している。

これらの例で「X」という状態が恒常的に固定されていることは、「ふだんは」のような時間的変動を表す副詞と相容れないことから立証できる。

- (19) a. *地球はふだんは温暖化しているが、今日は寒い。
 b. *アフリカ大陸はふだんは砂漠化しているが、このところ緑が茂っている。
 c. *その樹脂は、ふだんは硬化しているが、今は柔らかい。

この性質は、「-化」を伴わない表現と比較することで、より鮮明になる。

- (20) a. その患者の病状はふだんは {安定／*安定化} しているが、今日は突然、悪くなった。
 b. 地球全体が {温暖になった／*温暖化した} が、今日は寒い。

「-化」が時間に影響されない固定的な属性を表すとすると、時間と共に変動するような局面レベルの状態を表す名詞には「-化」が付かないはずである。

局面レベルの状態というのは、たとえば「病気 (sick), 酩酊 (drunk), 発売中 (available)」などであるが、実際、予想通り、これらに「-化」を付けることはできない。

(21) *父が病気化した。*友人が酩酊化した。*新製品が発売中化した。

ここで、どのような接尾辞でも、接尾辞が付けばいつも恒久的な属性を表すわけでもないことに注意したい。次の「赤らむ」や「気色ばむ」は一時的な状態しか表さない。

(22) a. 彼女の顔は、そのとき一瞬、赤らんだ。

b. ふだんは冷静な総理も、新聞記者からの質問には一時、気色ばんだ。

以上を総合すると、「X 化」というのは「ある名詞が X という固有の属性を持つものに (半) 永久的に変化する」という意味を表す。いったんその属性が備わると、それを取り除いて元に戻ることは難しい。その点で、「-化」は、私たちが求める「内在的属性に特化した言語形式」と見なすことができるだろう。

では、「内在的」という意味合いはどこから出てくるのだろうか。次節ではその答えを、クオリア構造の形式役割と構成役割を用いて説明していく。

3. 2. 「-化」が表す属性とクオリア構造

個々の例を検証する前に、結論を先に述べておこう。

- 本稿の着眼点

「X 化」という形態は、修飾 (叙述) する名詞の内在的な属性が X に変化することを意味する。その際、内在的な属性 (プロパティ, **property**) というのは「被修飾名詞のクオリア構造における形式役割, 構成役割, あるいは目的役割に記載された何らかの要素を指す」と規定できる。すなわち、「主語が / を X 化する」というのは、その主語名詞が持つ何らかのプロパティ (クオリア構造の形式役割, 構成役割, あるいは目的役割に記載された何らかの要素) を X に書き換える (あるいは、そこに X という概念を付加する) ということである。

では、例を見てみよう。まず、形式役割に該当すると思われる例であるが、形式役割とは、Pustejovsky (1995) では“**that which distinguishes it within a larger domain**”と定義される。ここではその具体的な内容を(23)のように定めておく。

(23) 形式役割の具体的な内容

モノの物理的な性質（具象物か抽象物か、固体か液体か気体か、生物か、無生物か、人間か動物か神か、大きいか小さいか等）

「X化」の「X」が(23)の規定に該当すると思われる例には、次のようなものがある。

(24) a. 名詞全体の物理的な性質

液-化, 気-化, 石-化, 化石-化, ミイラ-化, ガス-化, 骨-化, 糊-化, 乳-化, 神格-化, 擬人-化, ゼリー-化, 角質-化, 数値-化, 具象-化, 抽象-化, 画像-化, 可視-化, 不可視-化, 名詞-化

b. 全体の大きさ, 形状, 固さ, 色合いなど

肥大-化, 矮小-化, 長大-化, 大型-化, 小型-化, ミニチュア-化, スリム-化, 肥満-化, ナノ-化, 白骨-化, 段丘-化, 音声-化, オパール化, 平滑-化, 3D-化, 硬-化, 軟-化

物理的な内在的性質を指す場合は、「液／気／石／骨／糊／硬／軟」など一字漢語が基本的であるように思える。基体 X が一字漢語ということは、「化」との形態的な結びつきが強いということであり、形態的な親密さは、形式役割の物理的性質を表すという意味と相関している（意味と形の類像性 *iconicity*）。

次に、構成役割に言及する例を見てみる。構成役割とは、Pustejovsky (1995) の定義では“**the relation between an object and its constituent parts**”とされ、ここではその具体的な内容を(25)のように定めておく。

(25) 構成役割の具体的な中身

モノの構成部品, 材料, 材質, 成分など

これに該当すると思われる「X化」の例には次のようなものがある。

(26) a. 内部の組み立て方

統一-化, (脳の) 一側-化, 画一-化, 規格-化, 均一-化, 均質-化, 平準-化, モジュール化, グループ-化, 類型-化, 類別-化, グラフ-化, 図式-化, 分別-化, レイヤー-化, 階層-化, 多様-化, ワンパターン-化, 子会社-化, (社会の) 高齢-化

b. 構成成分の性質

白髪-化, デジタル-化, 老-化, 老朽-化, 軟口蓋-化, 有声-化, 無声-化, 映画-化, 小説-化, アニメ-化, (書類の) 電子-化, 欧米-化, 500万画素-化, (駅の) 無人-化, 無人島-化

形式役割か構成役割かの見分けは、なかなか難しいところがあるが、考え方としては、モノの全体像を捉えて、その全体の物理的性質に言及する場合は形式役割、モノの内部構成を見て、その構成の仕方や構成成分の性質に言及する場合は構成役割に振り分けた。たとえば、「社会が高齢化する」という場合、社会全体が高齢になるというより、「社会を構成する年齢層において高齢者層の割合が多くなる」と捉えて、「高齢化」は構成役割に言及する例と見なしている。「小説を映画化する」という表現では、その元になるストーリーは同じでも、小説の場合は「紙媒体」と「ストーリー」から成り、それが映画化されると、紙媒体が「映画 (film)」という媒体 (構成要素) に変化すると解釈している。「アジアが欧米化する」と言うのは「アジアの国が欧米の国になる」という意味ではない。アジア諸国を成り立たせている構成要素のひとつとしての「生活様式」が欧米風になるという意味である。

「X化」という表現は極めて生産的であり、すべての例を完全に整理することはできないが、ざっと見たところ、ほとんどの例は上の2つのクオリア——すなわち形式役割と構成役割——のいずれかに振り分けることができそうである。

しかし3番目の可能性として、「X化」がクオリア構造の目的役割に言及すると思われる例もある。目的役割は、Pustejovsky (1995) の元々の定義では“purpose and function of the object” (モノの使用目的と機能) であり、人工

物の場合はそれだけで十分に理解できる。しかしモノが人間の場合は、使用目的や機能が元々あるわけではない。人間に元々備わっている恒常的な機能というのは、その人の典型的な性格ではないかと思われるので、ここではそれも加えておく。

(27) 目的役割の中身

モノ本来の目的や機能、その物を特徴づける恒常的な性質（人間なら典型的な性格）

これに該当すると思われる「X化」の例には次のようなものが含まれる。

(28) a. 使用目的, 用途

汎用-化, 商品-化, 製品-化, 専門-化

b. 使用の仕方

自動-化, マニュアル-化, 機能-化

c. 典型的な性格・振舞い・機能など

幼児-化, 男性-化, 女性-化, 凶暴-化, タレント-化

この中で(28c)がPustejovsky (1995)には見られないと思われる項目である。たとえば「人間は年をとると幼児化する」というのは、実際の年齢が小さくなるということではなく、態度や振舞いが典型的な幼児のようになるということである。「近ごろの男性は女性化している」というのも同じように分析できる。

ここまで説明してきたクオリア構造による分析を図解しておこう。

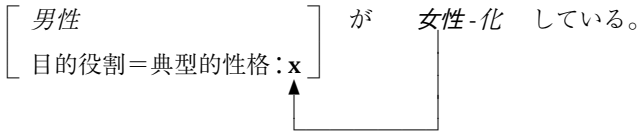
(29) a. 「X化」が主題名詞の形式役割を書き換える例

「アルコールが気化した。」



b. 「X 化」が主題名詞の目的役割に情報を加える例

「男性が女性化している」



筆者の調べたところでは、語彙化されて一般的に使用される「X 化」のほとんどは、形式役割に言及するグループか、構成役割に言及するグループかに属する。形式役割または構成役割は、モノの物理的、客観的な属性を表し、物理的、客観的な属性というのは、そのモノが内在的に持っている固有の性質であり、普通なら容易に変更することはできない。「-化」という接尾辞は、そのような固有の性質が X になることを述べる表現であると見なすことができる。その際、「アルコールが気化する」のように、物質がまるごと変化する場合は形式役割の変更に依るのであり、また、「駅を無人化する」というように構成部分（駅員）の変更を述べる場合は構成役割の変更に依るのである。他方、目的役割に言及するものの中で、「女性化」のように典型的な性格を表す場合は、むしろ少ないようである。

4. 英語の接尾辞 -ize と -ify について

最後に、「-化」と同じように状態変化を表すと思われる英語の接尾辞 -ize と -ify に簡単に触れておく。この二つの接尾辞は、純粹に形態論の観点からは Aleasa (1989) で、また語彙概念構造の観点からは Lieber (1998), Plag (1999), Lieber (2004) などで詳しく論じられている。とりわけ、Lieber と Plag は、Jackendoff (1990) の方式による語彙概念構造 (LCS) を用いて、-ize の意味構造を幾つかの LCS テンプレートに分類し、それら相互の意味関係を説明しようとしている。Lieber (1998) の分類と意味表示を (30) にまとめておく。

- (30) a. [Event ACT([Thing], [Event INCH[State BE([Thing],
[Place AT([Thing, Property base])])])])]
e.g. *unionize, civilize, epitomize, velarize*
- b. [Event ACT([Thing], [Event GO([Thing base],
[Path TO/ON/IN([Thing])])])]
e.g. *carbonize, texturize, apologize*
- c. [Event ACT([Thing], [Event GO([Thing], [Path TO([Thing base])])])]
e.g. *summarize, hospitalize*
- d. [Event ACT[Thing], [Manner LIKE([Thing, Property base])])]
e.g. *criticize*

ここで1つ1つの公式を説明することは控えるが、要するに、(30 a, b, c)は対象物(目的語)の状態変化ないし位置変化を表し、(30 d)だけが主語の動作を表す。

Plag (1999)は、これらのLieberの公式を批判的に検討して独自のLCSを示し、更にそれを承けてLieber (2004)自身は-izeと-ifyのLCSの鑄型を次のように統合している。(Plag (1999)は-ifyと-izeを、同じLCSを持つ音声上の異形態(allomorph)と見なしている。)

(31) -ize, -ify (Lieber 2004: 82)

[+dynamic([_{volitional-i}], [_i])] ; [+dynamic([_i],
[+dynamic, +IEPS([_i], [+Loc([])])]), <base>]

この統合式は、セミコロン(;)の左側と右側で原因事象と結果事象を表し、[x does something to y] such that [x causes y to become z/go to z] という意味である。Lieberによれば、右側の結果事象は任意的で、右側がなければ、(30 c)と同じく動作のみを表す。

Lieber (2004)が(29 a, b, c, d)の4つの公式を(31)に一本化した目的は、-ize, -ifyの多義性(polysemy)を単一のLCSの鑄型に収斂させるということである。しかしながら、日本語の「-化」との比較からすると、むしろ一本化しなかったほうが、-ize, -ifyの多義性に異質なものが含まれるという

事実をよりよく捉えることができる。すなわち, **-ize**, **-ify** で終わる動詞で日本語の「X 化」に対応するのは次のように, 名詞の本質的属性を表す場合だけである。

(32) a. **-ify** 動詞

acidify (酸化), **beautify** (美化), **calcify** (石灰化), **citify** (都市化), **classify** (分類, 類別化), **codify** (成文化), **deify** (神格化), **diversify** (多様化), **emulsify** (乳化), **gasify** (ガス化), **liquefy** (液化), **mummify** (ミイラ化), **nitrify** (ニトロ化), **nullify** (ゼロ化), **ossify** (骨化), **personify** (人格化), **petrify** (石化), **salify** (塩化), **saponify** (鹼化), **solidify** (硬化) など

b. **-ize** 動詞

aerosolize (噴霧状にする), **Americanize** (アメリカ化), **caramelize** (カラメル化), **computerize** (コンピュータ化), **crystallize** (結晶化), **departmentalize** (部局化), **idealize** (理想化), **homogenize** (均質化), **unionize** (労働組合化), **visualize** (視覚化), **vocalize** (有声化), **westernize** (西洋化), **womanize** (男性を軟弱にする) など

他方, 次のように一時的な状態変化を表す場合は, 日本語の「X 化」には対応しない。

(33) **containerize** (コンテナで輸送する), **crucify** (十字架にはりつけにする), **exemplify** (例示する), **gratify** (満足させる), **horrify** (怖がらせる), **hospitalize** (入院させる), **humidify** (湿らす), **prettify** (飾り立てる), **victimize** (虐待する, 犠牲にする) など

この違いを明示するためには, 英語の **-ize**, **-ify** の LCS において, 結果状態を表す **Property** あるいは **State** を二分し, 恒久的なものの一時的なものに分ける必要がある。

更に, 英語の **-ize**, **-ify** は次のように意図的な行為のみを表すこともあるが, これらに当たる「X 化」も存在しない。

(34) anthropologize(人類学をする), botanize(植物採集をする), speechify
(演説をぶつ), preachify(くどくど説教する) など

このように考えると、英語の -ize, -ify の多義性は次のような過程を経て、拡張していったのではないかと推測できる。

(35)
$$\underbrace{\hspace{10em}}_{\text{「化」}} \underbrace{\hspace{10em}}_{\text{内在的な属性}} \rightarrow \text{-ize, -ify} \rightarrow \text{一時的な状態} \rightarrow \text{(一時的な) 動作}$$

このうち、日本語の「-化」は左端のみを表現し、これこそがモノの内在的属性と見なされるべきものである。

[注] 本稿は、平成 19 年度科学研究費（基盤研究（B）17320067）による研究の一部である。

参考文献

- Aleasa, Noor Sultan Saif (1989) *English Causative Verbs Ending in -en, -fy, and -ize*. Ph.D. dissertation, Georgetown University.
- Arche, María (2006) *Individuals in Time*. John Benjamins.
- Geniušienė, Emma (1987) *The Typology of Reflexives*. Mouton de Gruyter.
- 影山太郎 (2003) 「動作主属性文における他動詞の自動詞化」, 語学教育研究所 (編) 『市河賞 36 年の軌跡』 271–280. 開拓社.
- 影山太郎 (2005) 「辞書の知識と語用論的知識—語彙概念構造とクオリア構造の融合にむけて—」, 影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラム No. 1』 65–101. ひつじ書房.
- Kageyama, Taro (2006) “Property description as a voice phenomenon,” in Tasaku Tsunoda and Taro Kageyama (eds.) *Voice and Grammatical Relations*, 85–114. John Benjamins.
- 影山太郎 (2006) 「外項複合語と叙述のタイプ」, 益岡隆志ほか (編) 『日本語文法研究の新地平 1: 形態・叙述内容編』 1–21. くろしお出版.
- Kageyama, Taro and Hiroyuki Ura (2002) “Peculiar passives as individual-level predicates,” *Gengo Kenkyu* 122, 181–199.
- Krifka, M., F. Pelletier, G. Carlson, A ter Meulen, G. Link, and G. Chierchia

- (1995) “Genericity: An introduction,” in G. Carlson and F. Pelletier (eds.) *The Generic Book*, 1–124. University of Chicago Press.
- 小林英樹 (2004) 『現代日本語の漢語動名詞の研究』 ひつじ書房.
- Lieber, Rochelle (1998) “The suffix -ize in English: Implications for morphology,” in Steven Lapointe, Diane Brentari and Patrick Farrell (eds.) *Morphology and Its Relations to Phonology and Syntax*, 12–34. CSLI.
- Lieber, Rochelle (2004) *Morphology and Lexical Semantics*. Cambridge University Press.
- 野村雅昭 (1978) 「接辞性字音語基の性格」『電子計算機による国語研究 IX』 102–138. 国立国語研究所.
- Plag, Ingo (1999) *Morphological Productivity: Structural Constraints in English Derivation*. Mouton de Gruyter.
- Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*. MIT Press.
- 田窪行則 (1986) 「-化」『日本語学』 5/3: 81–84.
- 益岡隆志 (2004) 「日本語の主題—叙述の種類の観点から」, 益岡隆志 (編) 『主題の対照』 3–17. くろしお出版.